

正倉院年報

一、古裂の整理

昭和三十七年度においては第百二十六号古櫃に納める幡類残闕の整理を主とし、第八十三号櫃以下数櫃に残存する絹絶布類塵芥の整理を併せ行つた。その結果は次のとおりである。

一、錦幡残闕 七旒

一、羅幡残闕 一旒

一、綾幡残闕 一旒

右のうち錦幡残闕六旒、羅幡残闕一旒はいずれも聖武天皇御一周忌御齋道場幡で、内二旒は欠損しているが各々題箋を付す。文に「平城宮御宇後太上天皇周忌御齋道場幡 天平勝宝九歳歲次丁酉夏五月二日己酉^右番 東大寺」とある。

一、大幡垂脚断片 四片

幅四四・五厘あり、緋綾地に縹あるいは紺綾の花形裁文を貼付してある。聖武天皇御周忌御齋灌頂大幡の垂脚である。

一、錦綾類残片 四十一片

錦綾残片は小片ながら文様が珍らしく、数少ない二色綾も含まれている。

雑裂は慶長以降の金銀欄、緞子、刺繍などの裂片で後世混入したものである。

一、褐色布断片 八片 軸第二五一号

細布、布幡類の垂脚である。

二、宝物の整理

本年度において宝物の整理を完了したものは次のとおりである。

一、薬塵及び薬物夾雑物

去る昭和二十四年から始められた薬物類の調査の結果、薬塵中より選別されたもの、種々薬中に混入夾雑せるものより選出分離したものを整理し、各々容器を新調してこれに納め保存することとした。この調査選別の結果、献物帳（種々薬帳）所載の薬物にして既に消耗したと考えられていた薤核、胡椒、阿麻勒、奄麻羅、黒黄連、理石、鬼臼、檳榔子、呵梨勒などの諸薬が発見されたことは既に発表されたとおりである。

一、玉 類

辛櫃二合に納め中倉に保存されている玉類は凡そ六万六千枚、内数百枚は水精、琥碧、瑪瑙玉であつて他は皆硝子玉である。而してその形

状には曲玉あり、金剛珠あり、丸玉あり、平玉あり、露玉あり、蜻蛉玉あり、振玉あり、中空の吹玉あり、大は径三厘に及ぶものより小は径二、三耗以内のものもあるが、径一厘前後の丸玉が最も多い。硝子玉においては黒、褐、緑、黄、紺、縹の各色があつて紺、縹を除き他は鉛ガラスである。このほか破玉、瑠璃玉原料（ガラスの素地で板状をなす）、金剛砂など数裏が併存されている。今これを整理し類に応じそれぞれ容器を新造してこれに納めた。

三、宝物の修理

本年度において宝物の修理を終えたものは次のとおりである。

一、馬 鞍 第五号

鞍橋、鞍褥、轡、尻脊、鐙、銜、三懸を具備している。鞍橋は前後の両輪は牟久木、四枚居木は檜で共に椽材である。居木先はそれぞれ両輪の外に突出し、後輪には白革製丸紵の鞍を付しているが完全な形を失っている。鞍褥は表裏共熏革を張り、表には鳥唐草文様、裏の上下端には唐草文様を抜出している。心は白氈を麻布で裏む。轡は表に黒漆塗鞆革を用い、裏は溜塗革を張り、布、横目蘭筵、縦目蘭筵、木葉、横目蘭筵、布の順に重ねて心としている。尻脊は表に白絶、縁と背には花卉飛鳥文をあらわす熏革の広縁をめぐらし、布を裏裂としている。心は轡同様木葉、蘭筵三枚を重ね鹿布で包んである。鐙は壺鍔、鉄製打物黒漆塗、鍔紐は兵具鍔、同じく鉄製黒漆塗で鍔の鉸具頭

に連繫している。銜は蕤蕤銜の様式に属し鉄製、鎖面懸付の鉸具で面懸の黒漆革製の銜受にかけてある。三懸はいわゆる玉三懸で絹打紐の貫緒に白、黒、赤に染分けた鹿角製の玉を連ねて荘る。但し胸懸尻懸は莊玉の配色が面懸と異なり果して一具をなすものか否か詳かでない。尻懸には緋組緒の尾挾がある。腹帯は平紵の白布。

一、衲御礼履 一両

御礼履の上に衲の御袈裟を召された時に用いられた御履である。聖武天皇の御所用のものと伝えられている。緋皮造り、真珠と雑色瑠璃を鏤めた銀製花形座と黄金押縫で荘る。内面には白皮を張る。敷皮は蘭筵を重ねて心とし、白布を纏い更に葡萄唐草文白綾で覆うてある。

四、経巻の修理

聖語藏経巻の修理は前年に引続き乙種写経の部大般若経の修理を行った。本年度においては巻第三百卅一以下五十巻である。それぞれ旧態を存して修理し、その標または軸の闕失するものは古様を模して新補した。巻中識語あるものを掲げると次のとおりである。

巻第三百卅一 卷末墨書「葉師寺八幡宮一切経也 嘉慶二戊辰年三月書写畢」

巻第三百五十五 卷末墨書「正元元年己未四月九日為果遂亡考從三位平宗宣卿大願令書写畢 沙門藏涌」

巻第三百六十 卷末墨書「正元元年己未五月十四日書写訖為沙弥寂心

出離生死往生極樂也 沙門藏涌 (別筆) 藥師寺八幡宮一切經」
卷第三百九十八 卷末墨書「正元元年己未七月七日書寫之為沙弥寂心
出離生死而已 沙門藏涌 (別筆) 正和二首□中句看閱而致此卷大士力
法割心肉与婆羅門或是何人思此」と

五、宝物の特別調査

(イ) 紙質調査

紙質調査は去る昭和三十五年度より始まり本年を以て終了した。本年
は昨年より引続き国印ある各国の文書の紙質の比較検討と東南院文書中
の延暦から延久に至る平安期の文書の紙質の調査、更に聖語藏経卷中主
として隋唐経紙の調査を行つた。その結果正倉院文書の殆んど大部分の
紙は楮紙(かぢ又はこうぞを原料とした紙)であつて、その他に麻紙及
び雁皮紙(斐紙)があり、時としてはそれ等の繊維を混合して漉いた紙
もあるようである。調査員は甲南大学教授文学博士寿岳文章、関西医科
大学教授医学博士大沢忍、京都工芸繊維大学教授理学博士町田誠之、大
阪学芸大学教授理学博士上村六郎、製紙実技者安部栄四郎の五氏であ
る。

(ロ) 陶器調査

正倉院に伝存する陶器は薬物の容器である薬壺、薬碗の須恵器十点と
三彩二彩単彩の釉薬陶器である鼓胴、鉢、皿、小塔残闕の類六十八点と
がある。特に釉薬陶器については内外人の注目するところであり、過去

においても大陸製説を唱える学者もあつたが、近年日本各地において緑
釉のかかつた壺、碗、皿などの破片が続々と出土するに至つて正倉院に
蔵する一群の釉薬陶器がその製作地を決定する上にさらに重要な資料と
なつてゐる。陶器調査はこれ等須恵器および釉薬陶器の製作手法、素地
や彩釉について詳細な調査を行うを目的とする。調査員は東京芸術大学
教授加藤一、日本陶磁協会理事小山富士夫、東京国立博物館考古課長田
中作太郎、京都国立博物館陶磁室長藤岡了一、名古屋大学教授理学博士
山崎一雄の五氏である。

六、聖語藏古訓点経卷の複製

本年度において古訓点経卷の複製移点を完了したものは次の三卷であ
る。

一、唐経第六号 四分律 卷十八、卷五十一

唐経四分律の聖語藏本は六十卷中十六卷現存するが、各巻紙背に「東
大寺印」なる方形朱印を有するところから奈良時代以来東大寺に珍襲さ
れていたものであることが知られる。

全巻に加えられたヲコト点は喜多院点系と三論宗点系で、初め喜多院
点系のものが施されたあと三論宗点系が点ぜられたものである。春日政
治博士は加点年代を願経四分律古点に次ぎ、成実論天長五年点の前に位
置づけられているが、恐らく至当な見解であらう。

律はその本質上日常生活に関連する事項の記述が多く、論疏に比して

文章様式に変化があり、思弁的學術用語よりも生活語が多く使用されているもので、文化史や言語史の資料として価値あるものである。この点からみて加點當時における言語史資料として願經四分律古點とともに唐經四分律古點のもつ価値はまことに大きい。願經四分律の現存遺品は三十二卷（内四卷は民間に流出）であるが、中には數卷加點が全く消滅した卷もあるのに対し、唐經四分律は全卷加點が見られる。しかし白點は願經四分律古點の方に明瞭な部分が多く、読み下しは本經卷の方が困難である。

移點本作成に卷十八、卷五十一を選んだのはこの二卷の加點が稍精密で、内容も變化に富み、文章形式も多様であると認められるからである。

ただ本点に見られる二種の加點は加點時期が極めて接近しており、ある箇所は甲種點が鮮明であり、他の箇所は乙種點が明瞭であるというように、單に胡粉の新古のみで二種の加點を識別することは不可能と思われるところがすくなくない。概して極初期資料は点図集所載のヲコト点と一致するものがすくなく、同一系統の点本間にあつても星點以外は共通點がすくないのが常である。

いま本点十六卷から喜多院と三論宗點の識別を行つてみると、星點にあつては容易であつても、線點鉤點その他にあつては、某のヲコト點を果して喜多院點のものとすべきか、又は三論宗點と断定すべきかを決しにくいことが多い。そこで、それぞれの所屬を明瞭にし得る根拠が見出

されぬかぎり、便宜主義の識をまぬがれたいが、その何れかに書きわけける以外に方法がないので、やむなくこれに従つた。なお三論宗點を胡粉、喜多院點を白群によつて示すことにした。

一、雜写第二十四号 中論 卷一

本經卷は卷首に僧叡の序を有する卷一の全文に卷二觀三相品第七三五偈を合わせたものを一卷としたもので、平安中期以前の書写と思われる。

本卷全部にわたつて白點白書の書き入れが見られる。加點態度はやや疎略で星點が長めであること、別訓や字音注記に鉤形の合點をつけてあるのが特色である。一箇所ではあるが漢文の本文を抽出しヲコト点や別訓をつけた裏書がある。

ヲコト点やかな字体によつて、加點は本文書写と年代がへだたらぬ時期に行なわれたものと推定される。かな字体に草書體のものが多く使用されているなど本點の特色である。

ヲコト點は点図集に所見のないものであり聖語藏や東大寺の點本には類例が発見されていない珍しいものであるが、石山寺本大智度論卷三十五の星點と極めて近似していることは注目すべきことで、所謂テニハル點系の一種と推定し得るものである。

本卷の卷首より一、二枚（主として序文の部分）は白點傍訓の剥落が多いが他はおおむね復原可能であり、従つてヲコト點の歸納もできるし平安中期以前の國語史資料として貴重な點本と認められる。

七、古文書マイクロ・フィルムの作成

昭和二十九年以後引きつぎ行なわれている正倉院古文書類のマイクロフィルムの撮影は、本年度において続々修第三十七帙第一巻から同第四十六帙第四巻まで、計八十三巻を了した。